

## 「この子から出て行け」

2022年03月03日

「霊は息子を滅ぼそうとして、何度も息子を火の中や水の中に投げ込みました。もしできますなら、私どもを憐れんでお助けください。」イエスは言われた。『『もしできるなら』』と言うのか。信じる者には何でもできる。」その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のない私をお助けください。」イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものを言わず、耳も聞こえさせない霊。私の命令だ。この子から出て行け。二度と入って来るな。」すると、霊は叫び声を上げ、ひどく痙攣を起こさせて出て行った。(マルコ福音書9章22節～26節 a)

主イエスと3人の弟子たちは山から下りて来た。すると、他の弟子たちが大勢の群衆に取り囲まれ、律法学者たちと議論をしていた。群衆は主イエスを見つけて驚き、駆け寄って挨拶をした。主イエスが何を議論しているのかをお尋ねになると、群衆の一人が「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。霊がこの子を襲うと、所かまわず引き倒すのです。すると、この子は泡を吹き、歯ぎしりをして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださいようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした」と、事情を報告した。主イエスは、「なんと不信仰な時代なのか。いつまで私はあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならぬのか」と嘆かれた。弟子たちには悪霊を追い出す権能を授けられていたので、悪霊を追い出そうと試みたが、この子の場合、それができなかった。主イエスは「その子を私のところに連れて来なさい」と命じられたので、人々はその子を連れて来た。霊は、主イエスを見ると、その子に痙攣を起こさせた。子は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った。父親に「いつからこうなったのか」と問うと、父親は「幼い時からです。霊は息子を滅ぼそうとして、何度も息子を火の中や水の中に投げ込みました。もしできますなら、私どもを憐れんでお助けください」と懇願した。主イエスは、『『もしできるなら』』と言うのか。信じる者には何でもできる」と言われた。父親はすぐに、「信じます。信仰のない私をお助けください」と叫んだ。父親は、弟子たちに癒しを求めたが、できないでいた。主イエスの場合も、できないのではないかと疑い、「もしできるなら」と言ったのであるが、主イエスに「信じるも者には何でもできる」と叱責され、慌てて、「信じます。不信仰な私をお助けください」と言い直した。不信を恥じ入り、息子の癒しを求める父親の必死の返答である。主イエスは、汚れた霊に、「ものを言わず、耳も聞こえさせない霊。私の命令だ。この子から出て行け。二度と入って来るな」と叱責し、命令された。すると、霊は叫び声を上げ、ひどく痙攣を起こさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの者は「死んでしまった」と言ったが、手を取って起こすと立ち上がった。この子に付いていた霊は、今の医学から言えば、てんかんであろう。著者は、主イエスはてんかんの霊に取りつかれた少年を、その霊から解放し、父親と息子を救ったと伝えている。

主イエスが家に入られた時、弟子たちはひそかに「なぜ、私たちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねると、「この種のもの、祈りによらなければ追い出すことはできないのだ」とお答えになった。祈りとは、神への全面的な信頼である。弟子たちは、自分こそができると高慢になっていた。癒しの権能を発揮できなかった。主イエスは、神に対する全面降伏の祈りが人に救いをもたらすと弟子たちに諭したのではないか。